

2016

**An exhibition by students from
Musashino Art University
at RIKEN Yokohama Campus**



OKAWAHARA Nobuto	01
KANAI Megumi	02
SUZUKI Shizuna	03
SUYAMA Keiko	04
OTSUKI Miho	05
KIIRE Miho	06
SUZUKI Rie	07
YAMAGUCHI Tokiyo	08
IKEGAMI ryoko	09
ONO hitomi	10
TAKIMOTO yumi	11
TSUKADA koji	12
NISHIDA jun	13
NISHIHARA sumino	14
FUJIWARA keiichiro	15
MORITA yoshiko	16



Sculpture

01

彫刻学科 3年
大川原 暢人
展示場所…交流棟 1階

多感で悩み多き不安定な思春期の少年を作った。何かに近づくということは今の地点から離れなければならない。大人に近づく少年は心の行くままに生きることから離れなければならないと気づく。どこに向かうべきなのか、正解もわからないままひたすらに探し続けるのである。



少年 Void
H160 × W50 × D27cm
2016年
FRP

02

彫刻学科 3年

金井 愛

展示場所…交流棟 1階

ふっくらとたたずむスズメの姿を前にした時、自然が生んだこの美しさにただ従い作品にしようと思いました。そしてそこに石自らが生んだ形が重なり、この作品は完成します。私はスズメと石が作品へと昇華していくのについて行き、時々その手助けをただけなのです。



スズメ
H26 × W22 × D43 cm
2016年
小松石

03

彫刻学科 3年

鈴木 寧菜

展示場所…北研究棟 1階

寒天質の体を持つメンダコは、陸では水中のような形を保つことは出来ません。

とても傷つきやすい生き物でもあり、水揚げされたメンダコが水族館で展示されるニュースを時折耳にしますが、すぐに死んでしまいます。

そんな不確かで壊れやすい生物を、石という変化しにくい素材で表現することにより、環境が変わっても自分らしくいたいという思いを込めました。



メンダコ
H32 × W70 × D65 cm
2016年
小松石

04

彫刻学科 3年

須山 恵子

展示場所…東研究棟 1階

滑稽に廻り続けるという印象から脱却した姿



尾を食うて廻る
H64 × W110 × D110 cm
2016年
FRP



Printmaking



05

大学院版画コース1年

大月 美歩

展示場所…交流棟2階、食堂

ひとの思い描いた予想をずらしていくようなもの（意識や、人や、時間）が混ざって、元のものや計画と一緒にある、放ってあるという状態に、自然さや、新たなイメージを感じます。自分の想像をはみ出していくような何かが見たいと思いながら、制作をしています。



いつかつぎハギ
H97 × W128cm
2016年
リトグラフ、コラージュ、木版

06

大学院版画コース 1年

喜入 美帆

展示場所…交流棟 2階、食堂

誰も一度は思い描いたことがあるであろうここではない世界、現実ではない世界への強い憧れのヴィジョンを版表現で表す。

ここではない憧れの世界は戻った人間が居ないため憧れとして成立していて、

その思いや気持ちははっきりとした色彩や地に足をつけた表現で表せるものではないと私は考える。

そのため、手順や描画方法が大きな意味を持つ。

誓約や欠落を抱えてまでも表現することで、その世界は具現化することができるのだ。



夕日の國

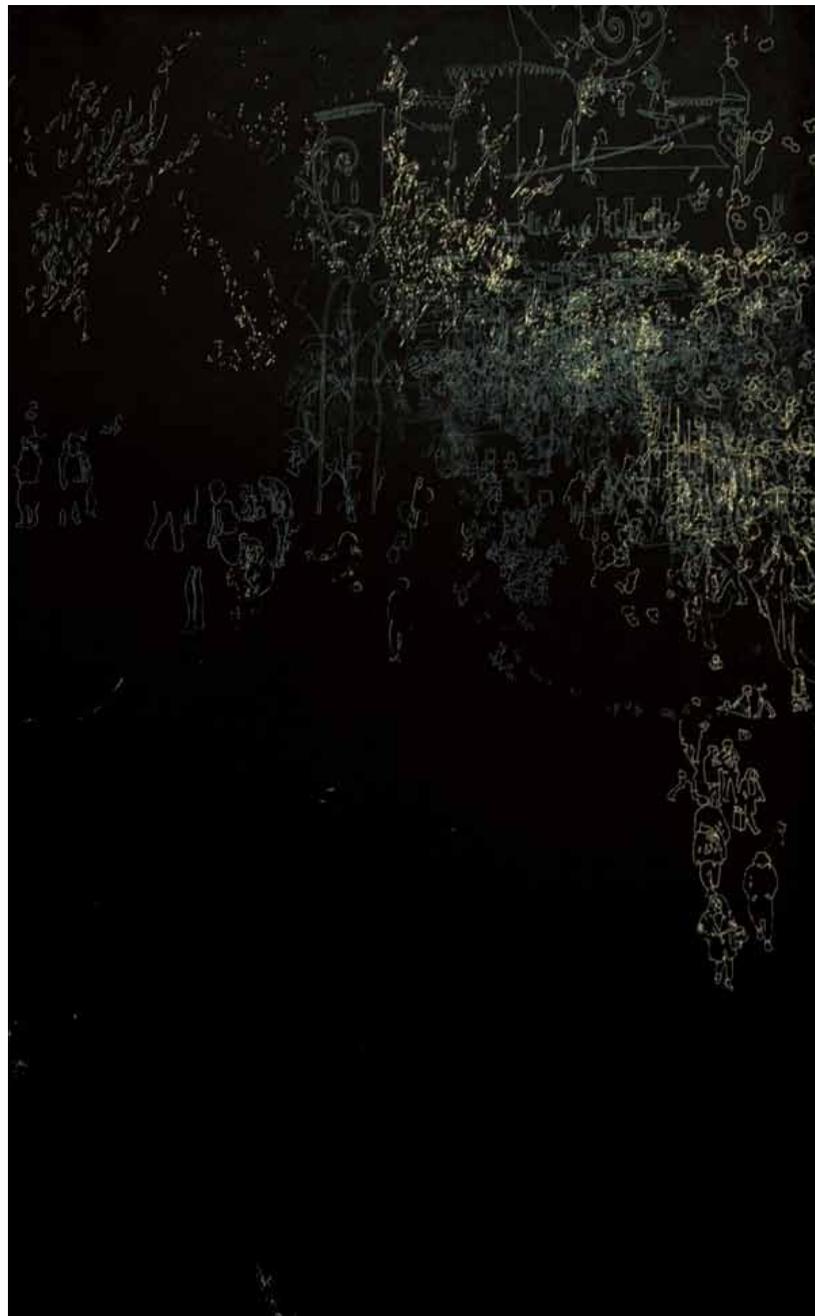
H97 × W117 cm
2016年
和紙、シルクスクリーン

心の中に出現する架空の棚。

時の流れの中で失われていくものに対して私たちは敏感であり、その時には気持ちの整理をします。保管と整理を繰り返し、同時に新たな記憶の到来を待っている。そんな想像をして絵にしました。



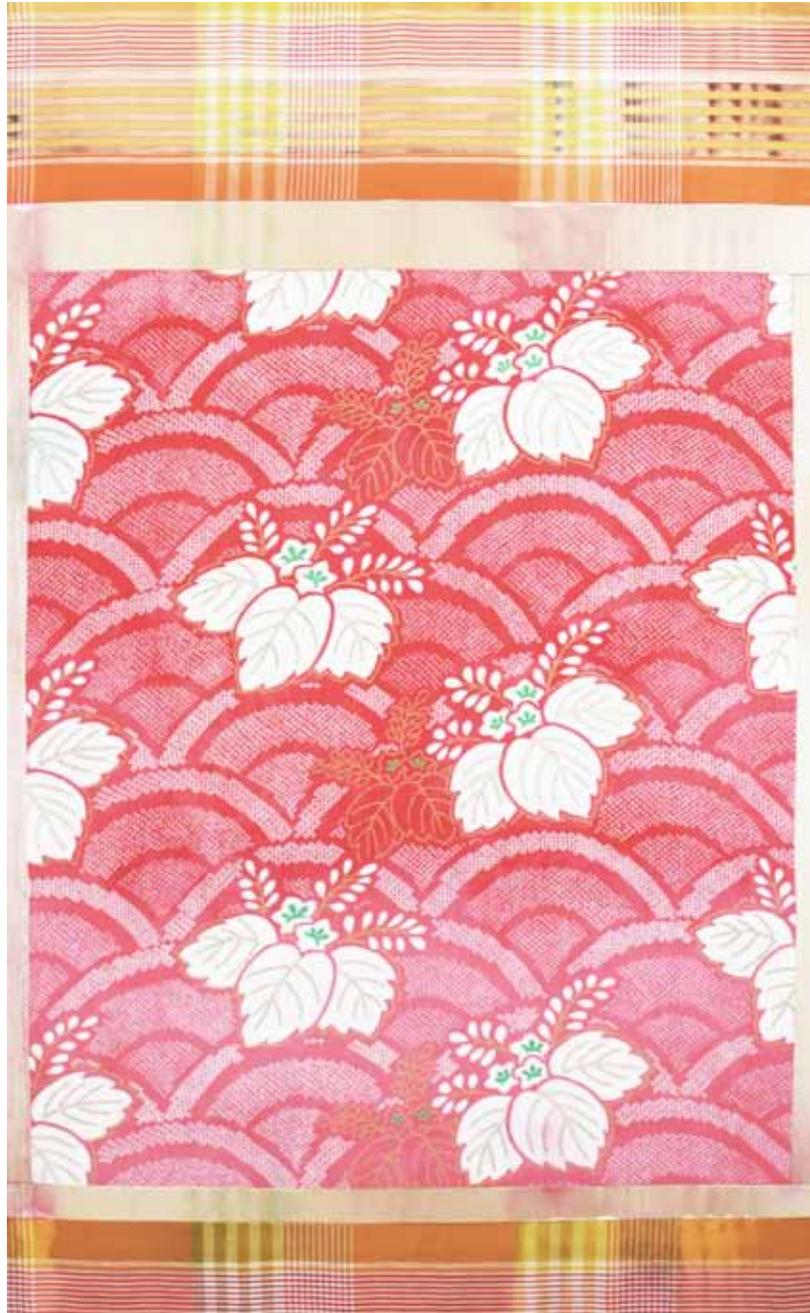
私は絵を描くこととボードゲームで遊ぶことは非常に似ていると思う。特に将棋や囲碁のような駒を使うボードゲームと似ている。そのようなボードゲームには定石な戦い方や定石から大きく外れた妙手などがある。絵も同じように画面の中で点や線や面などをどのように配置するかによって、絵の良し悪しが左右される。点を画面に一点配置するするのでも、点のサイズを考えたり、傾きを考えたり、配置を考えたり、様々なことを考える。二手目は一手目の点との関連を考えながら点を置く。三手目以降も同じように続く。私は出来るだけ、定石から外れた配置の作品を作っていきたい。配置が、独創的でありたい。



Painting



“色よりも 香こそあはれと おもほゆれ 誰が袖ふれし 宿の梅ぞも” 梅の花はその姿よりも香りこそがいとおいしい。
この庭の梅のよい香りは、一体誰の袖が触れた移り香なのだろう。



誰が袖 #2-1-i
H145.5 × W89.4cm
2016年
脱色した布にアクリル



誰が袖 #2-4-t
H162 × W89.4cm
2016年
脱色した布に油



誰が袖 #2-5-y
H162 × W130.3cm
2016年
脱色した布

10

大学院油絵コース 1年

小野 仁美

展示場所…交流棟 1階ロビー、中央研究棟 2階C212、西研究棟 5階会議室

色とそうでない部分の境界に作品の外から光が当たって、光が反射する、色が奥からはき出される、私の言葉で言い換えれば、息を吸って吐くような感覚。その感覚を受け取りながら、また新たに色を重ね、染み込ませる。その行為を繰り返す。



ある表皮に耳を澄ます

H125 × W175 cm

2016年

ポリエステル布、アクリル絵具、木製パネル



上
表面を知る

H16.2 × W130.2cm

2016年

ポリエステル布、アクリル絵具、木製パネル



下
鳥肌立つ雑音

H91 × W92cm

2016年

ポリエステル布、アクリル絵具、木製パネル

この作品はアトリエにあるカタチをきっかけに、奥行きなどを見つけ空間を描いていったものです。
絵の具の物質感と画面の平面性から何かを見つけて貰えると嬉しいです。



The scenery of the atelier m1-no.1

H162 × W162cm
2016年
油彩、キャンバス



The scenery of the atelier m1-no.2

H162 × W162cm
2016年
油彩、キャンバス

私は主に日常で目にする何気ない光景や出来事をモチーフに作品を制作しています。

描かれている物それぞれに深い意味合いはありません。

対象を再現的に描写するのではなく、例えるなら意識しないでふと、それが視界に入ってきた時の一瞬の姿、そこから感じ取った「印象」を描き出そうとしています。

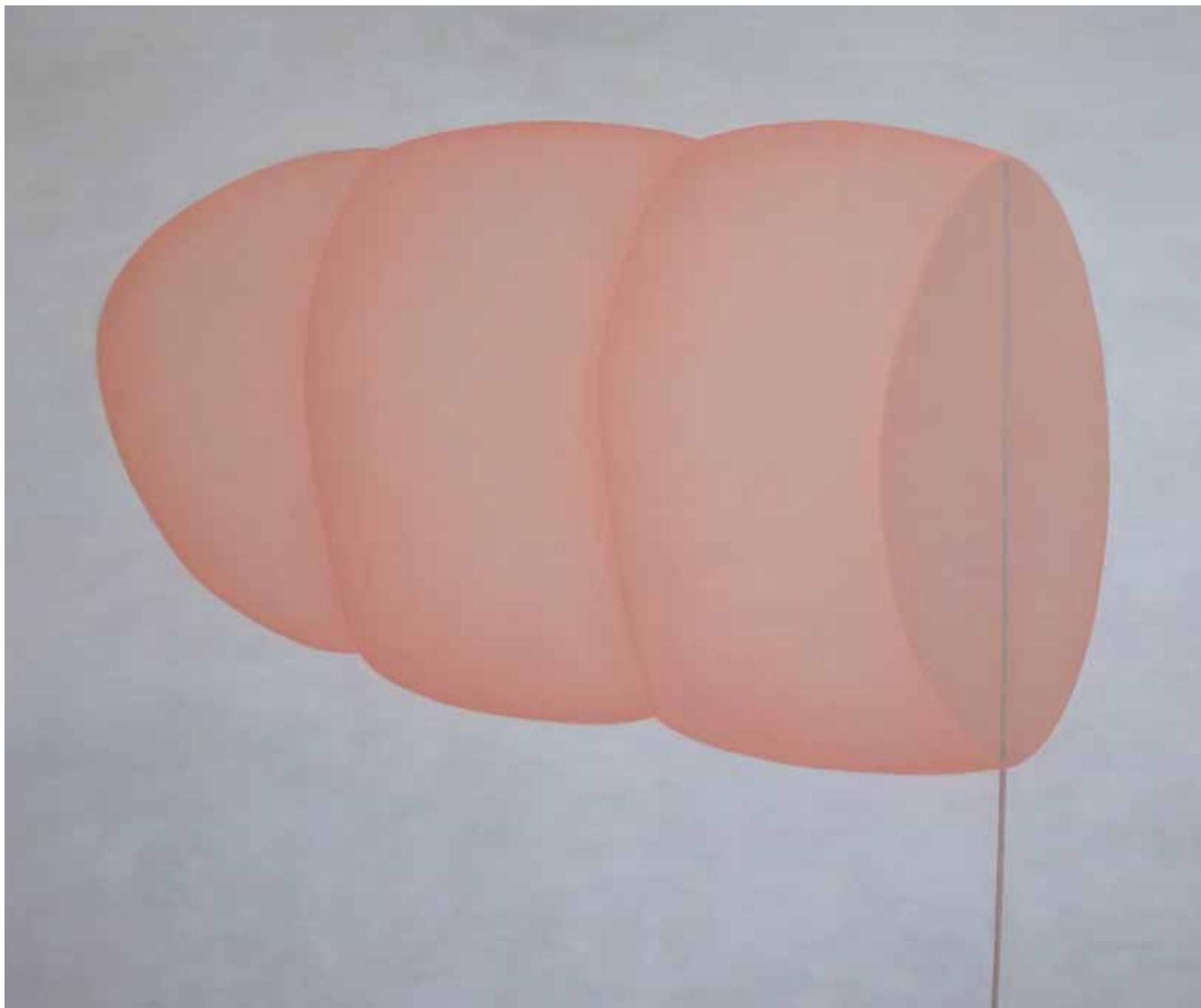
私の作品を通して鑑賞者それぞれが、そこに自身の記憶の断片を見出し、様々な体験を想起して世界を広げてくれたら、と思っています。



Landscape
H112 × W162cm
2014年
油彩、砂、キャンバス

Lavatory
H114.5 × W112 cm
2016年
油彩、砂、キャンバス

空気によって膨らんだ形態をモチーフにしています。
それらからは実物以上の温度のようなものを感じます。



ふきながし
H162 × W194 cm
2016年
油彩、キャンバス

14

大学院油絵コース 1年

西原 澄乃

展示場所…中央研究棟 2階特別会議室

誘い込むような海に足を踏み入ると、そこはもう思っていたような場所ではなく、すべての感情が混沌とする世界だった。
水たちは脈打ち、その鼓動はゆっくりと私をまだ知らぬところに運んでいく。



気吹—いぶき—

H158 × W550cm

2016年

油彩、モデリングペースト、シナベニヤ



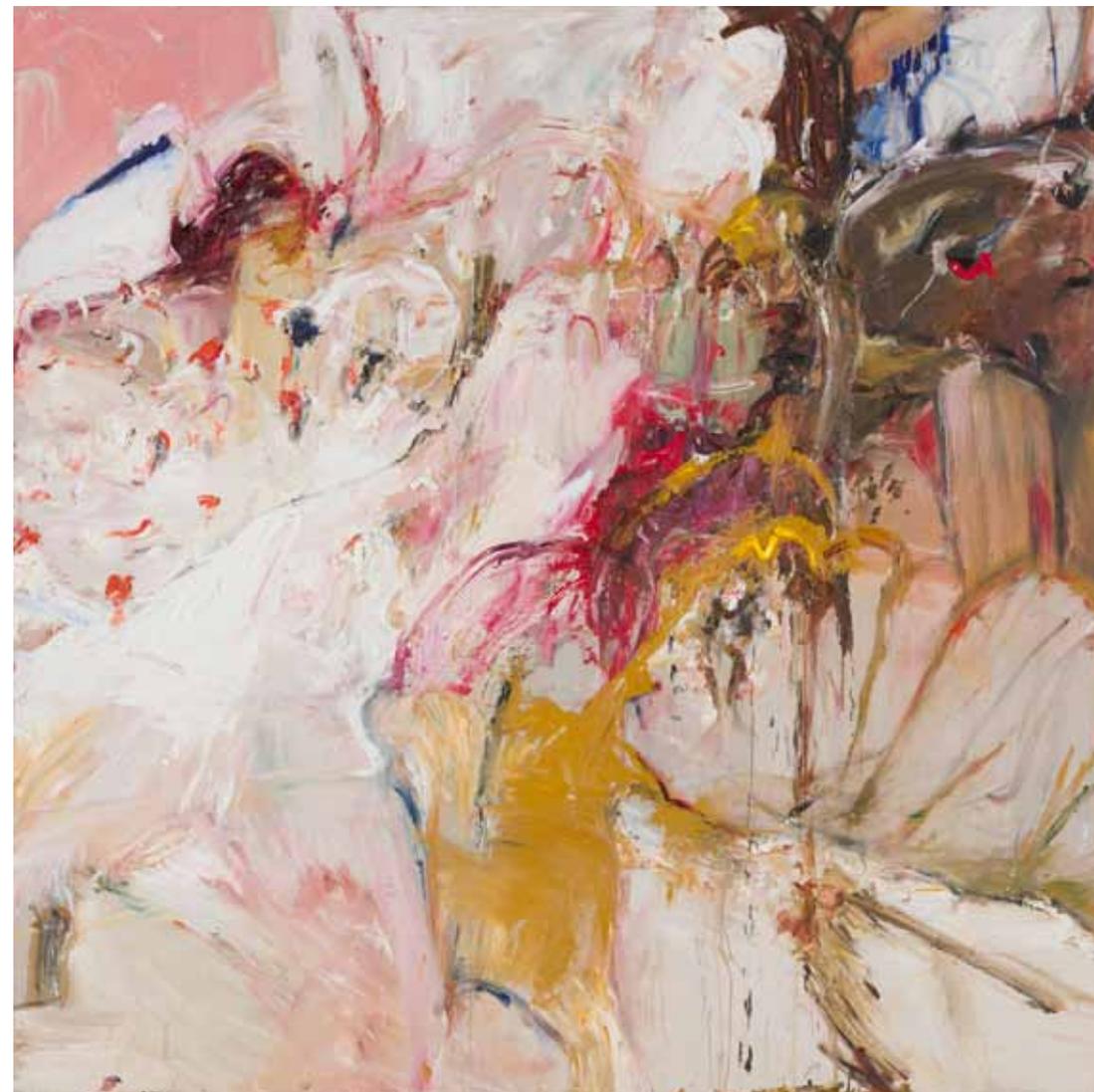
Birds Fall Down Into the Valley
H72.7 × W91cm
2015年
油彩、マーカー、パステル、色鉛筆、キャンバス



Self-Portrait for a Rusty Frame
H80.3 × W100 cm
2015年
油彩、マーカー、パステル、色鉛筆、キャンバス

Untitled (Moon, Hand) -no.1
H38 × W45.5cm
2015年
油彩、マーカー、パステル、色鉛筆、キャンバス

絵の具の質感を味わいながら描き、自分の抑制している部分をキャンバスに吐き出すことによって、人間の本能的な欲望や精神の深い部分、有機的なイメージを表現している。



無題
H227.3 × W181.8cm
2016年
油彩、キャンバス

EAT
H190 × W190 cm
2016年
油彩、キャンバス

目 的

理化学研究所展示プロジェクト 2005 と題されてスタートしたこの展示は、科学と芸術の健全な発展のために発案されました。国立研究開発法人 理化学研究所はライフサイエンス分野において科学技術の最先端研究を推進していますが、最先端であるがゆえに科学者の人間性が新しい現象の発見や技術開発に繋がることも多分にあり、このような科学者の精神活動は芸術家の創作における精神活動と似た側面を持っているように思われます。このプロジェクトは武蔵野美術大学の教育の場で産み出された学生たちの優れた作品を多数の科学者に紹介することにより、科学者の精神活動にどのような影響を与えるか、また科学者から若い芸術家にも何らかの影響を与え将来の創作活動の参考にもなるようなことがあれば、芸術と科学という異分野の交流・触発という観点から非常に好ましいものになるのではないかと考えられ、計画されたものです。



彫刻学科研究室
油絵学科版画研究室
油絵学科油絵研究室

2016

An exhibition by students from Musashino Art University at RIKEN Yokohama Campus

出品：

大川原 暢人
金井 愛
鈴木 寧菜
須山 恵子
大月 美歩
喜入 美帆
鈴木 理恵
山口 時世
池上 怜子
小野 仁美
滝本 優美
塚田 光示
西田 純
西原 澄乃
藤原 圭一郎
森田 可子

【理化学研究所】

鈴木 貴（横浜事業所 所長）
岩田 伸一（横浜事業所 研究支援部 部長）
中村 学（横浜事業所 研究支援部 総務課 課長）
森 容子（横浜事業所 研究支援部 総務課 副主幹）
長田 麻理子（横浜事業所 研究支援部 総務課）
渡邊 史郎（横浜事業所 研究支援部 総務課）

【協賛】理研共済会 横浜部会

【武蔵野美術大学】

伊藤 誠（彫刻学科研究室教授）
遠藤 竜太（油絵学科版画研究室教授）
赤塚 祐二（油絵学科油絵研究室教授）
山本 麻璃絵（彫刻学科研究室助手）
越智 也実（油絵学科版画研究室助手）
阿部 彩葉子（油絵学科油絵研究室助手）

発行日：

2017年2月28日

